

研究ノート

福音協会（教会）史—「成全の教理」の盛衰¹

中井幸夫

1. はじめに

「The Christian Perfection（キリスト者の完全）の教理は、メソジストと呼ばれる人々に、神が託された grand depositum（偉大な預託物）である。そして、主としてこの教理を普及させるために、神は我々を召しだされたように思われる²。」（ジョン・ウェスレー、1790年9月15日付書簡）。

最晩年のジョン・ウェスレーはこう語った。

18世紀後半、神はドイツ系アメリカ人ジェイコブ・オルブライト（またはアルブレヒト）（Jacob Albrecht）を召しだし、彼をして北アメリカに福音協会（教会）（The Evangelical Association）という小さな群れを誕生させ、The Christian Perfection の教理（成全の教理）を普及させようとした。そして、この群れは誕生後70年たって日本伝道を開始した。

この拙論では、この“The Evangelical Association”という小さな教派にスポットライトを当てることにより、「神が託された grand depositum」がどのように盛衰するか、その預託がどの程度継続するかを検討したい。また、この教派の日本伝道の特殊性を考察し、「成全の教理」の日本への伝播を概括してみたい。

¹ この拙論は、2008年9月に日本ウェスレー・メソジスト学会で発表させていただいたものを加筆訂正したものである。

² 山内一郎『メソジズムの源流』（キリスト新聞社、2003）、50頁。（ ）部分筆者。

参考 [日米メソジスト教会合同図]

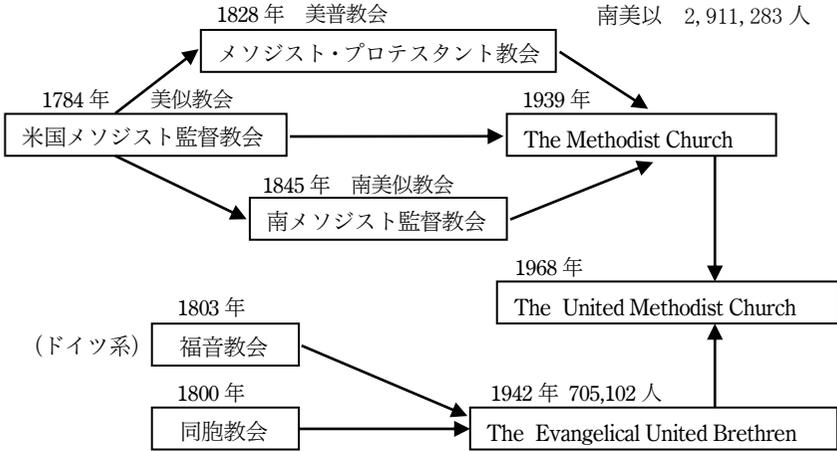
[アメリカ]

1938年の会員数

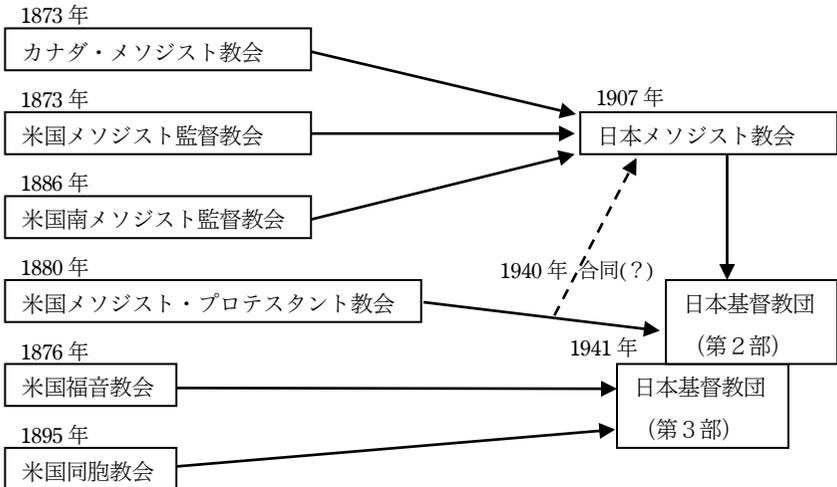
美普 196,985人

美以 4,747,792人

南美以 2,911,283人



[日本]



2. 福音協会(教会)の始まり

まず、福音協会(教会)の呼称について断っておくと、このグループは1816年から100年以上の間“*The Evangelical Association*”(福音協会)という名称を使っていた。1922年になってはじめて“*The Evangelical church*”と「教会」を名乗るようになった。このため、本論文では、米国のこのグループを「福音協会」と表記したいが、日本に宣教してきたこのグループは「福音教会」と名乗っていたため、便宜上「福音教会」と表記することにした。

福音教会の歩み³は、ジェイコブ・オルブライトという一人のドイツ系アメリカ人に起源をもつ。彼は1759年5月1日にペンシルバニア州に生まれた。彼は富裕な農民兼レンガ製造者として、ルター派の教会に所属し、信仰者としてはおぎなりの生活を送っていたが、自分の子供たちが赤痢で次々に亡くなっていったことを契機として信仰生活に入り、1791年7月31日に、ある祈禱会でウェスレーと同じような回心を経験した。

その後、彼はメソジスト教会に移り、熱心な活動を開始するに至った。彼は言う、「このころ私は、メソジストのごとくに熱心で活動的な人々の団体であり、その条例及び規則が私によく適していると思えたものは他になかった。この理由から私は彼らに加わり、私の魂に大きな恵みを得たのである⁴」と。

その後メソジスト教会で定住伝道師となったが、彼にはひとつの願いがあった。それは、当時はアメリカのメソジスト教会では当然英語で礼拝が行われていたが、英語のわからないドイツ系アメリカ人のために、ドイツ語でメ

³ 福音教会の歴史について、この拙論では、日本基督教団東金教会による『東金教会百年のあゆみ』(東金教会、1990)を全面的に参照させていただいた。著者の中村征一郎牧師には、その大著を引用させていただくことにご理解いただいたが、ここに深く御礼申し上げたい。なお、中村牧師は、参考文献として、主に次のものを挙げている。W. W. Orvig, *History of the Evangelical Association* (Cleveland: Ohio, 1858) ; P.H. Eller, *History of Evangelical Missions* (Harrisburg, Pennsylvania, 1942) .

⁴ 中村、前掲書、31頁。

ソジズムの教えを説くことにあった。しかし、当時のメソジスト教会は彼のそのような願いを受け入れなかった。次第にオルブライトは独自の行動をとるようになった。ただ、その後の彼のとった行動は、徹底的に「メソジスト的」であり、ルター派、改革派、メノー派等、他の教派に対して、メソジストの教えを強要するに至った。それがために彼は大変な迫害・攻撃を受けたのだった。

1796年、彼は馬にまたがりドイツ系農民への巡回伝道を開始した。このような努力によってオルブライトの支持者も次第に増え続けたが、その次第は以下のとおりである。

1800年、3つの組会を組織（福音教会の誕生？）。

1803年11月3日、自分たちが教會的組織であることを宣言（福音教会の誕生？）。

1807年、220人の会員で「新生メソジスト年会」を開催。オルブライトが初代監督となる。このとき、「福音条例」を制定したが、これはほとんどアメリカのメソジスト教会のものの翻訳で、このとき「成全の教理」（The Christian Perfection）が採用された。

この「成全の教理」は福音教会の中心的教理であり続ける。そして、それは福音教会の140年の歴史を通じて一貫したものだだった。

本論では福音教会史のすべてを語ることはできないため、主に「成全の教理」を中心に述べることとなる。

3. 福音教会の発展

1816年、第1回総会を開催。組織の名称を“The Evangelical Association”とした。会員数1,401人。

1817年、「同胞教会」（The Brethren Church）との合同を検討。その後も何回か合同が模索されたがまとまらなかった。

同胞教会はドイツからアメリカに渡った改革派のフィリップ・オッターバイン（F.W. Otterbein）がメノナイト派の伝道者マルチン・ベーム（M. Boehm）と組んで伝道していったドイツ系の教会で、農村伝道を主としていた。それがドイツ系ということと教会政治が監督制によって行われたということで、

一般に福音教会と同類と考えられてしまうが、信仰理解は決して「メソジスト」と同じではなかったようである。そのことは次の文に端的に現れている。

「福音教会の者たちは同胞教会の者たちに向かい、その聖化の不徹底さを問題とし、同胞教会の者たちはこのような福音教会の者たちを靈的傲慢に陥っていると批判した⁵。」

この当時の福音教会はきわめて禁欲的な雰囲気を持っていて、多くの教職者が厳しい倫理規定に触れて解任された。禁酒は当然として、服装に関する規制も厳しく、贅沢な飾りのついた服は禁止されていた。そういった福音教会を見て同胞教会は靈的傲慢と批判したのであった。

一方、「同胞教会」は決して「聖化⁶」を目指す教会だったわけではない。「聖化」を何より大切に考えていた当時の福音教会からすれば、合同の対象としては問題があったのである。つまり、福音教会が「聖化」を追い求める気持ちがある限り、両者は永遠に合同することはなかったといえるのではないか。

1828年、「成全の教理」の信奉者、オルヴィグ (William Orwing) が活躍し始める。会員数 2,677 人。

1830年、この頃もきわめて禁欲的な傾向から、会員の除名者が続出した。英語による伝道の可否を検討。

1832年、“The Evangelical Association”の法人化。会員数 3,921 人。

1839年、福音条例の一部改正(華美な服装の禁止、戦争否定の一文を追加、禁酒条項、奴隷禁止条項制定)。会員数 8,040 人。

1841年、福音教会はアメリカ東部のペンシルバニアでスタートしたが、このころから伝道の中心が西部に移りはじめてきた。会員数 10,506 人。

1851年、ドイツ伝道開始(初めての海外伝道)。会員数 21,175 人。

1856年、オルヴィグが「成全の教理」についての論文を発表。

⁵ 中村、前掲書、55 頁。

⁶ “The Christian Perfection” (成全の教理) と「聖化」は別のものだが、本論では、ほぼ同義語として捕らえることにした。「ウェスレーの言う“*The Christian Perfection*”は、すなわち聖化を追い求めることと同じだ。」 森文次郎『ウェスレー研究会パンフレット No.6』、35 頁。

1857年、ネイツ（Solomon Neitz）がオルヴィグの論文を批判。

1859年、総会においてオルヴィグがネイツの説を厳しく断罪。オルヴィグ
第4代監督に選任。会員数38,370人。

次にここで、この「成全の教理」論争について説明してみたい。

4. 「成全の教理」論争

オルヴィグの「成全の教理」理解は次のようなものだった。

「信仰を求める者は成全を求めるべく召されている。そしてもし彼らが成全を達成し得なかったらそのとき彼らは主にまみえることができな
いのは確かである。ある者は完全な成全を得ないで死んだ者の運命はど
うなるのかと問うであろう。しかして彼らは失われた者となることは明
白である。部分的に聖化されたにすぎない者は罪ある者と同様天に招か
れることはない……。すべて義とされた者も全き聖化を得なければ疑い
なく失われてしまうのである⁷。」

これに対し、ネイツの反論は次のようなものだった。

「パウロの流れに沿って理解するとき、義認と聖化は二つに分かれるの
ではなく、それは人間の贖いのために神がなされるひとつのわざである。
信仰者は聖さを目指して常に戦い行く存在であるが、義認—聖化は究極
的には人間の努力において獲得しうるものではない。それは常に神の自
由なる恩恵によるものである。義認—聖化は報酬ではなく、キリストの
助けによる人のわざの結果でもない。ただそれは主の身代わりによって
人に与えられたものなのである。また救われた人間においてすら彼の上
に植えつけられた罪の根は残っているのであり、それゆえに人は義認—
聖化の場に保たれるべく常に神の継続的な許しの恩恵のうちに信頼を寄
せなければならない⁸。」

以上の論争に対して、福音教会全体では、オルヴィグに対するよりネイツ
に対する批判が起り、オルヴィグの極端な成全理解は忘れ去られてしまっ

⁷ 中村、前掲書、102頁。

⁸ 中村、前掲書、103頁。

た。

1859年の総会において、オルヴィグがネイツの説をきびしく断罪し、またネイツを支持したイースト・ペンシルバニア年会区を批判した。このことはイースト・ペンシルバニア年会区の態度を硬化させた。かくて彼らは――この時は成全論争も全教會的にはだいぶ沈静化していたのであるが――オルヴィグの監督再任を阻止しようと計った。1863年の総会において投票が開始されたとき、オルヴィグは事態を悟った。ネイツが彼にかわって監督に選任されることを願っていることは明白であった。かくてオルヴィグは監督選任に際して自ら退き、若いイリノイ年会区出身のエッシャー(J.J. Esher)を監督候補に推薦した。悪く言えばウェスト・ペンシルバニア年会区とイリノイ年会区が連合して、イースト・ペンシルバニア年会区に対抗する構図となった。投票の結果は僅差でエッシャーの当選であった。かくして「成全の教理のチャンピオン」エッシャーの登場となったのである。この後も総会ごとにネイツとエッシャーは監督の座を争ったが結果は常にエッシャーの勝利となり、年を重ねるごとにネイツとエッシャーの対立は根深くなっていった。

その後、オルヴィグ対ネイツ、エッシャー対ネイツ、ロング・エッシャー対ネイツ・ダブス、エッシャー・ヨーケル・ボウマン対ダブスという具合に引き継がれた。そのため、イースト・ペンシルバニア年会区と他の年会区の信頼関係も危うくなっていった。最終的に教会分裂へと向かっていく。

5. 日本伝道と教会分裂

日本伝道の問題も、同教会の分裂の原因となった。

1876年、米国福音教会は日本伝道を開始する。日本伝道については後で詳しく取り上げることになるので、ここでは教会分裂の原因となった事項について触れることにしたい。

福音教会は日本伝道の責任者として、その機関紙“The Evangelical Messenger”の編集者、ジェイコブ・ハッラーを任命した。しかし、彼らの日本伝道は困難を極めた。特に日本人信徒の歩止りが悪く、受洗しても来なくなる者が非常に多く、その度合いは日本の他の教派以上に顕著だった。

このような中、監督エッシャーが来日した際の落胆は大きく、エッシャー

はミッション・ボードに対して、強烈なハッラー批判をした。ところがこのとき “The Evangelical Messenger” の有力な編集者だったのが、このジェイコブ・ハッラーの兄、ヘンリー・ハッラーだった。エッシャーのジェイコブ・ハッラーに対する批判文をヘンリー・ハッラーが “The Evangelical Messenger” に掲載しなかったため、エッシャーの批判はヘンリー・ハッラーに対してもなされた。ヘンリー・ハッラーは彼を支持する有力な者達を有していたので、エッシャー監督の権限に屈するどころか両者の対立はますます激しさを加え、教会機関紙も二つに分かれてしまった。独文機関紙はエッシャー側に、英文機関紙はハッラーに同情的であった。

しかも、この論争は聖化論争とも深い関わりを有していた。即ちソロモン・ネイツ側にダブスとハッラーがおり、彼らを支持するペンシルバニアの年会区があった。一方オルヴィグ側にはエッシャー、ヨーケル、ボーマンがおり、イリノイをはじめとするいくつかの年会区がその背後に控えていた。このようにして、1856年のオルヴィグとネイツの「成全の教理」に関する論争に端を発した福音教会の不和は、30年を経て1887年一挙に噴出した。

分裂の原因としては「成全の教理」論争以外に次のものが考えられる。

- (1) 地域的セクショナリズム。これは特にペンシルバニア、またはオハイオ年会区の一部とイリノイ等福音教会にとっては後発年会区との対立である。
- (2) 英語圏とドイツ語圏の対立。これは当初福音教会ではドイツ語がほとんどすべてであり、いわば福音教会の公用語であったものが、後には英語が主流となったことから生じた対立であった。
- (3) 監督権限の強化とそれに対する反発。特にエッシャー監督の監督権の強大化に対する反発。
- (4) 監督間の分裂。エッシャー、ボーマンとダブスの対立は個人的な対立である以上にその背後にそれぞれの支持者があっただけに抜き差しならないものがあつた。
- (5) アメリカン・デモクラシーを支持する者たち（彼らは古くからのアメリカ移住民であった）と中央集権制を支持する者たち（ドイツからの移住が間もなく、それ故にその家庭に色濃く中央集権的気風が残り、その

雰囲気の中で育てられた者)との対立⁹。

とにかく 1887 年の総会は決定的な亀裂を作ってしまった。エッシャーとハッラーの対立を引き金にして福音教会は分裂し、次の 1891 年の総会は二つの地域で開催されることになった。こうして、福音教会は、“The Evangelical Association” (E.A.) (教会員約 11 万人)と“The United Evangelical Church” (U.E.) (教会員約 4 万人)の二つに分裂した。

ここで、E.A.と U.E.の相違点と共通点について簡記する。

(1) 監督の在任期間の制限

E.A.は監督の在任制限なし。一方 U.E.は 2 期 8 年を限度とする。

(2) 信徒の教会中枢への参加

従来の福音教会は平信徒の教会運営への参加にはなほだ消極的だったが、U.E.は総会議員の半数を平信徒によって占められるべきものとした。一方の E.A.は 1895 年の総会に同様の案が出されたが否決され、8 年後の 1903 年にそれはやっと可決された。

(3) E.A.・U.E.ともに当時もてはやされていた「社会的福音」に対して警戒感を持っていて、基本的に「社会的福音」には反対だった。

6. 「成全の教理」の衰退と再合同

以上、福音教会という小さな教派の歴史の中心には、「成全の教理」という柱があったことがよくわかる。ウェスレーの時代のメソジスト派にとって当然のごとく中心の教理であった「成全の教理」(The Christian Perfection)は、ジェイコブ・オルブライトによって福音教会の中心的教理とされ、その後継者であるオルヴィグやエッシャーたちによっても引き継がれた。しかし、その承継が次第に終焉の時を迎えることになる。オルヴィグ・エッシャーとネイツによる論争、そしてそれを端緒とした分裂騒動を経験したためか、人々は次第に「成全の教理」に距離を置くようになったのだろう。やがて「成全の教理」論争の中心者たち、オルヴィグ (1889 年死去)、エッシャー (1901 年死去)、ヨーケル (1904 年死去)、ダブス (1915 年死去)が次々死去する

⁹ 以上、中村、前掲書 135 頁。

と、E.A.とU.E.を隔てていた壁も取り除かれ、両者は再合同へと向かった。

1907年ころから起こった再合同への機運は1922年に実を結び、両教会は「The United Evangelical Church」という名称で合同を果たす。教会数2,916、教会員数259,417人の教会の誕生である。一度分裂したものが30数年を経て和解したというのはアメリカ教会史上でも極めてまれなことであった。

筆者は、分離したE.A.とU.E.が再合同したことをもって「成全の教理」が衰退したとは断言しない。しかし、問題はこの再合同後に「成全の教理」をもたない「同胞教会」と1942年に合同したことにある。そしてその合同の前兆として、「成全の教理」の衰退の現象が、1922年のE.A.とU.E.が再合同した時点で垣間見ることができる。

1922年再合同時の神学的な基調はウェスレアン・アルミニズムであり、教会政治が監督制であることも以前同様である。また教会条例について言えば、信仰箇条は19か条と定められたが、これも旧来の福音教会の信仰箇条を踏襲したものであり、「再生」「聖別」「成全」の教理が強調された点においても変わりはない。教会員の重んずべきものとして、個人的生活の清さが強調され、特別規則において奴隷制の否定、生活の節制、結婚についての定め等が規定されたことも旧来のままである。しかし、注目すべきは、「衣服に関する定め」が取り除かれてしまったことである。このことは軽微なこととして見過ごすことはできないように私には思われる。「華美な服装を禁止し、絶対禁酒で、聖なる生活を送ること」を規定していた福音教会に対し、かつて「靈的傲慢に陥っている」と批判した同胞教会と後に合同していく、いや、合同できてしまったことの一部が、この「衣服に関する定め」の排除に現れていると筆者は感じるのである。今日の教会でも、「禁酒」が形骸化してしまっている状況をよく見ては失望している筆者にしてみれば、この「衣服に関する定め」の排除は、福音教会の「成全の教理」の軽視、衰退の表れと感じられ、看過することはできないのである。

こうして、実質的に「成全の教理」を軽視し始めた再合同後の福音教会は、無頓着に「同胞教会」との合同へと向かっていく。

7. “The Evangelical United Brethren Church”へ

1942年2月に発表された合同の大綱において、福音教会と同胞教会の合同後の新しい教会名は、“The Evangelical United Brethren Church”とされた。両派の信仰箇条についてはそのまま存続を認めたが、教職制は長老制をとり単一教職制（Single Grader of Ministry）、内外伝道局はひとつの組織に統合された。

1942年10月の福音教会総会において、この大綱が上程された。そしてこの議案は圧倒的多数を持って可決された。この決議の後同胞教会においても臨時総会、年会等を経て、最終決定は1946年の合同総会においての事とされた。

1946年の合同総会は11月16日ペンシルバニア州ジョンズタウンにある第一同胞教会を会場として持たれた。かくして両者は合同した。教会数4,702、信徒数705,102人、教会合同には珍しく、一個の離脱教会も出さない完全な合同だった。

こうして合同した“The Evangelical United Brethren Church”は、1968年“The Methodist Church”と合同し、今日の“The United Methodist Church”となるのである。（「日米メソジスト教会合同図」参照）

8. 日本における福音教会の宣教（「成全の教理」を中心に）

次に米国福音教会の日本宣教を見ることにするが、ここでもその全容を記載するスペースがないため大幅に割愛することを、ここでお断りしたい。また、「米国福音教会日本宣教史」についてはそれなりに資料もあるものの¹⁰、肝心の「成全の教理」が日本宣教の中でどのようにされていたのかを示す十分な資料が見つからず、このため限られた資料での推論になることをお許しいただきたい。

1876年10月18日、サンフランシスコを出港した英国の汽船オーシアニック号は同年11月13日横浜に到着した。クレッカーら米国福音教会の宣教師

¹⁰ 中村の前掲書の他、「日本福音教会史」（小石川白山教会、1997）など。

を在日メソジスト宣教師の J.コレルが迎えた。こうして、米国福音教会の日本宣教がスタートした。

以下、このグループの日本宣教史を簡記する。

1880 年、日本宣教の初代総理ジェイコブ・ハッラー来日。

1881 年、カナダ・メソジストとの合同神学校設立。

1884 年、上記神学校、カナダとの合同解消。(その後細々と継続?)

1885 年、監督エッシャーが日本を訪問。

1887 年、「福音教会条例」発行。第 3 章に「キリスト成全の教理」と題して、「成全の教理」が大きく取り上げられる。

1892 年、日本年会が組織され、機関紙「福音の使」創刊。トラクト発行(聖化に関するトラクト 5 千部を含む)。

1895 年、このころ、宣教師団と邦人教師の不一致露呈。福音教会内で日本人の間では宣教師からの独立要求が強かった。

1897 年、神学校廃止。(全体的教勢不振によるもの。当時会員数 826)

1900 年、女性宣教師スザン・バンファインド来日(後に小石川において、教勢拡大の原動力となる人物。小石川教会は後に日本でこの教派唯一の自給教会となる。)このバンファインドの影響は非常に大きかった。

1901 年、メソジストとの合同問題。6 派合同を目指し合同した場合の教会名を「日本福音メソジスト教会」とする案もあったが頓挫。(日米メソジスト教会合同図参照) 会員数 988 人。

1902 年、このころ、もっとも盛んな教会でも礼拝出席者は 30 名しかいないという、教勢不振状態。

1913 年、日本の「美普教会」、「同胞教会」と 3 派での合同案が起こるが頓挫。

1919 年、このころには小石川の教会がバンファインドの活躍によって群を抜く教勢になっていた。

1921 年、会員数 1,329 人。

1926 年、後にこの群れの中心的牧師になっていく、岡田五作と藤田昌直が新任牧師となり、活動を開始する。

1932年、会員数、2,170人。

1941年、日本基督教団に合同。

次に日本宣教に関していくつかの問題を捉えてみたい。

(1) 日本の牧師のナショナリズム

ナショナリズムの問題について、『東金教会百年のあゆみ』の著・編者、中村征一郎は次のように語る。

「明治期における日本人の国家主義はそれをそれと意識させぬまま愛国心という美名のもとで、その偏狭さや高慢性への反省なしに賞賛されてきたが、牧師といえどもその明治期の雰囲気から無関係ではなかった。それが教会内においてもミッション・ボードの宣教師と邦人教師間に、ある軋みを生じさせていたのは当時どの教派でも同じであった。ただこの関係をはっきりと断ち切るべきかどうかについては長老制、会衆制の教派（日本基督教会、組合教会）と監督制（メソジスト教会や日本福音教会¹¹）で異なっていた。日本福音教会はその関係を保った中で内部的な独立を主張した¹²。」

このような状況の中で、宣教師たちがその「福音条例」のなかで強調されている「成全の教理」を強く訴えても、邦人牧師がどれだけ「成全の教理」を大切に考えたのか、疑問が残るところである。

(2) 日本福音教会の教勢が振るわない原因

1900年代まで日本福音教会の教勢はまったく振るわなかった理由として、中村征一郎はいくつかの原因を挙げている。

「まず、邦人牧師の他教派からの転入が多く、転出も多かった。（当時22人の邦人巡回職の中で、実に11人が他の教派からの転入者であった。）人材の育成がうまくいっておらず、育てている途中で、他教派に移ったり、途中で退いたりする牧師が多かった。宣教師と邦人牧師の不一致も

¹¹ 正しくは「米国福音教会日本年会」と表記すべきだが、慣例上このままとした。

多かった。その上神学校がなかったため、神学的傾向の不一致も著しかった¹³。」

このことは重要である。つまり、アメリカ本国における「成全の教理」の徹底さが、「成全の教理」についての神学教育を十分に受けていなかった日本人牧師によって日本では伝えられていなかったと思われる。

教派がその教理の純粋性を保つにあたって、何より神学校が重要であるといえる。

(3) 藤田昌直(日本福音教会後期の中心的学者)

その後の福音教会で中心的な牧師となっていく藤田は、丹波の日本聖書義塾(ソートン塾)を卒業したあと神戸中央神学校でカルヴァン主義神学を学ぶ。自ら、自分の神学は「カルヴィニスティック・パイエティズム[敬虔主義]」であると語っていた。戦後に誕生した日本聖書神学校でも中心的に活動。そこで大きな影響力を持っていた。このため、教え子や影響を受けた者はカルヴァン主義的な傾向を持つようになった者が多い(教え子の一人である中村征一郎も「成全の教理には好感をもてない」と言っている)。

私は藤田昌直個人を非難するつもりは毛頭なく、今日でも多くの尊敬を集めている偉大な牧師であるが、本人の言うように彼の神学が「カルヴィニスティック・パイエティズム」であり、メソジズムでなかったことは間違いない。

(4) 福音教会と神学校

福音教会はもともと伝道に熱心で、その一方で教会形成には重きを置かず、同時に神学教育にも熱心な教派ではなかった。米国の福音協会も、長い歴史の中で最初の神学校を創設したのが1876年のことである。実に、教会創立後70年以上の間神学校がなかったのである。その原因としては、「なまじの

¹² 中村、前掲書、264頁。

¹³ 中村、前掲書、318～319頁。

神学は信仰をだめにする」という考えがあったためだとされている¹⁴。この本国の傾向は日本にも引き継がれたのかもしれない。一応日本では、1881年にカナダ・メソジストと合同で神学校を創設、しかし、3年後には合同を解消し神学校を失う。1887年に「福音教会神学校」を創設するが1897年に廃校。この学校には山室軍平も入学していたが、「あまりに教育内容が乏しい」という理由で同志社に転向している。その後細々と神学校のようなものがあったようだが、1913年に青山学院と合同。この後福音教会は独自の神学校を持たない。神学教育に熱心でなかったという以上に、日本では教勢があまりに振るわないため、学校を維持、発展できなかったというのが正しいかもしれない。

このため、前述のように、他教派からの転入牧師が多いことなどから教理の純粋性など維持できなかったと考えられる。藤田昌直も、カルヴァン主義の神学校を卒業していて、なぜ福音教会にそのまま留まっていたのか不思議なほどである。せめて、青山学院等メソジスト系の神学校の出身者だけで牧師を固めればよかったと思うのだが、現実にはそれすらできなかったのであろう。

以上のように、米国福音教会の日本宣教においては、スタート当初は宣教師側が「成全の教理」を唱え、その「条例」に「成全の教理」が中心的な存在として掲載されるなど、教派の中心的教理となるよう努力されていたが、日本人側の宣教師に対する反発や、神学校のなかった中でこの教理を十分に教育できなかったであろうことなどにより、この教理が、日本人牧師に徹底せず、教会員の間に浸透しなかったのではないかと推察される。

9. 日本宣教、その後。

米国福音教会の日本宣教史は1942年の日本基督教団創立で終了するが、その後、この群れの伝統を引き継いだと考えられる神学校や教会について触れてみよう。

¹⁴ 中村、前掲書、128頁。

神学校としては現在日本基督教団の6つの認可神学校の中のひとつである「日本聖書神学校」がこの流れの中にある。日本聖書神学校は1946年5月に創立され、はじめのうち校地を数回移転したが、最終的に現在の目白にある旧福音教会の敷地に移った。岡田五作、藤田昌直ら旧福音教会の関係者が中心だったが、創立準備時点では気賀重躬や後のインマヌエル綜合伝道団の創始者蔦田二雄もかかわるなど、多様な顔ぶれで構成され、純粹に旧福音教会によって創設された神学校とはいえない。しかし、1956年には当時の“The Evangelical United Brethren”から1万5千ドルもの寄付を受け、校舎を建設したことから考えても、米国福音教会の強い影響を否定することはできない¹⁵。

この神学校の現在の後援会は、旧福音教会の「目白」「小石川白山」「田園調布」教会等と、旧美普教会の「蒔田」「横浜本牧」教会等で構成されている。旧同胞教会の関係も深く、いわば1913年に実現しなかった、福音、同胞、美普の旧メソジスト系の3派合同が現在になって実現した形となり、神学校を中心に、関係教会が「宣教的循環」とも言うべき良好な関係を形成している。

しかし、筆者の調べたところでは、過去30年程度の卒業生の中に、ウェスレーやメソジストについて卒論を書いたものは、皆無である。

教授陣など関係者のなかにドイツ敬虔派の伝統にある者や前記の藤田を師と仰ぐ者も多く、盛んに「敬虔主義」の伝統を引き継いでいることが強調される一方、“The Christian Perfection”についてほとんど触れられていない¹⁶。

米国福音教会が、禁酒を貫き、禁欲的生活を重んじ、社会的福音には見向きもせず、靈的傲慢に陥っていると批判されるほど、徹底した“The Christian Perfection”を追い求める教派だったことを思うと、現在の日本聖書神学校が、米国福音教会の伝統を引き継いでいるということではできない。

また、福音教会の伝統を引き継ぐ教会においてはどうかだろうか。残念なが

¹⁵ 藤田昌直編『日本聖書神学校20年史』（日本聖書神学校、1967）。

¹⁶ 塩島光三『福音教会のルーツ』（イーグレープ、2007）は、比較的「キリスト者の完全」についても多く触れているが、それでも筆者の見るところ、敬虔主義に重きをおき過ぎている。（著者塩島は、小石川白山教会で藤田から受洗している）

ら筆者が知る範囲では“*The Christian Perfection*”はそれぞれの教会において中心的教理として残っているとは思えない。

個人的な話しながら、日本聖書神学校を中心とした「宣教的循環」の中で信仰に導かれ、救われた筆者としては、このことは大変悲しく、残念でならないのである。

10. 「grand depositum」140 年期限説

日本における、とあるインターネットのサイトに、「教会耐用年数 140 年説」という説が書かれていた¹⁷。ルター派教会も、バプテストやメソジストも創設してから、スピリットが揮発してオリジナリティを失い、その中心的な教理を失うまでに要した期間がどれも不思議なことに約 140 年であったと、そのサイトには書かれている。

確かに、マルティン・ルターの宗教改革も 17 世紀中ごろには形骸化し、フィリップ・シュペナーの敬虔主義が起こる。

ジョン・ウェスレーとその継承者に神が預けられた“*The Christian Perfection*”の教理も 140 年後には薄れ、そこからホーリネス運動が起こった。

1800 年に“*The Evangelical Association*”に託された「成全の教理」も 140 年後の 1942 年にはその預託期間が終了し、「同胞教会」という「成全の教理」を持たない教会と合同することにより、神に返還することとなったと考えられないだろうか。

このように、神からそれぞれの教派に預けられた中心的教理は、大きなムーヴメントとして発展した後、おおむね 140 年でその預託期間を終了することが多く、これを筆者は、勝手ながら「grand depositum (神から預けられた教派の中心的教理) 140 年期限説」と名づけた。

そして、この「説」の一般的な流れは次のようになる。

「成全の教理」(*The Christian Perfection*) の様な厳しい教理が広まり始めた

¹⁷ セブンスデー・アドベンチスト教会 (SDA) に関するホームページに掲載されていた。<http://homepage3.nifty.com/newSDA/SDAQ&A.htm> そのサイトの管理者は、「SDA も創立して今が 140 年ほどの時期である」として、SDA が教会としての使命を失うのではないかと憂慮していた。

当初はごく小数の者だけがそれを守り、その数は増えてはいかない。会員が増えてもあまりの厳しさに退会し、または退会させられる者が多く、会員増にならないのである。しかし、イギリスのメソジズムの場合は、ウェスレーの説教の力だけではなく、炭鉱労働者や工場労働者のように、もともとイギリス人で、教会に連なり、聖餐に与かりたいと願う人々が大量に入会していくことによって急激な会員増につながった。また、アメリカの福音教会の場合も、ドイツ系の移民という特殊事情があり、移民増とともに会員が増えた。つまり、そういうプラスの事情がないとこういった厳しい中心的教理は発展しないのである。ただ、こうして発展していった場合、会員数が増えるに従い、その厳しさが嫌がられ、次第に中心的な教理は形骸化する。そして、形骸化することにより厳しさが緩み、逆に会員は順調に増えいくのである。こうして 140 年ほどで中心的な教理はその役割を終える。これがこの「説」の一般的な流れである。

ところで、日本の福音教会に目を移すと、日本の場合は、キリスト教に対する逆風もあり、入会者がいてもすぐ退会するという日本福音教会特有の歩止りの悪さとなって現れ、宣教のスタートから数十年の間はひどい教勢の低さという結果になった。しかし、その後この中心的教理が、前記した宣教師と邦人教師との軋轢や、神学教育の不徹底さにより、中心から後方に追いやられたとき、初めて会員は増えていくのである。今回そのことを裏付けることができるような十分な資料がなく、あくまでも推論の域を出ないが、このようにして日本の福音教会では、ごく初期には「成全の教理」がその中心的教理とされていたが、会員の増加し始める 1910 年代には形骸化し、実質的な中心的教理となりえなかったと思われる。

結語

ジョン・ウェスレーの聖化論にまぎれもなくその痕跡が認められるというニュッサのグレゴリウスの動的聖化論の、その最大の特徴は「エペクタシス」という概念であると大頭眞一はいう。

「聖化が神との関係であるといわれて久しいが、エペクタシスは静的関係ではなく、神との動的関係である。たましいの姿勢といってもよ

い。神に向かって体を伸ばして、前傾姿勢で走るその姿勢が完全なのである。人が完全を得たと考えて走るのをやめるとき、エペクタシスは消滅する¹⁸。」

米国福音教会の歴史を顧みると、その「成全の教理」論争に見られるように、この教派が極端すぎるほど「聖化」を追い求めていたことがわかる。

これは筆者の持論だが、「信仰義認」というのは温泉のようなもので、信仰義認のみを標榜する人は、快適なお湯にどっぷりつかり、熱爛の日本酒を飲んで、「自分は信仰によって義とされたのだから、もう何もすることははない」といつて酔っ払っている人のように思える。信仰義認のみで聖化を唱えないキリスト教に筆者は価値を認めない。あくまでも神に向かって前傾姿勢で走り続けることこそ大事なのであり、歴史上この「エペクタシス」をあらゆる教派の中で最も徹底的に求め続けた教派の一つである米国福音教会に強く共感するのである。

米国福音教会は小さな教派教会だった。しかし、だからこそ、この小さな教会の歴史を辿っていくと、教会のもつ中心的な教理の盛衰の流れを克明に把握することが出来る。

米国福音教会は神から預けられた“The Christian Perfection”という grand depositum を、筆者の言う「grand depositum 140 年期限説」の典型例として 140 年の預託期間後に神に返還し、他の教派と合同して行った。そして、その日本宣教では grand depositum の普及という本来の目的をほとんど達成できないで終わった。

確かに、日本において現存する米国福音教会の伝統を持つ神学校や教会たちは、今日それぞれにキリスト教関係組織として立派な働きをしている。しかし、本国において神が託された「成全の教理」が、日本にはほとんど伝えられず、現存していないと断言せざるを得ないのだ。

ところで、ここで福音教会から離れ、日本のメソジスト教会に目を向けてみよう。

¹⁸ 大頭眞一「栄光から栄光へーニュッサのグレゴリオスの動的聖化論」、『ウェスレー・メソジスト研究』9 (2008)、79 頁。

1873年にスタートした北米のメソジスト教会の日本伝道から、今まさに140年が経過しようとしている。この間ある程度の盛り上がりを見せた戦前の更新伝道運動などのメソジスト運動や、野呂芳男を中心とした青山学院のウェスレー研究など、そのすべてがピークを過ぎ、下火になり、衰退してきている。また、実名を挙げて恐縮ながら、青山学院大学や関西学院大学において、ウェスレー・メソジズムを強力にリードしてきた深町正信と山内一郎が、この数年でそれぞれの現職としての役割を終え、両大学（学院）において、メソジズムは消滅に近い状態となってしまった。

日本基督教団に目を向けると、6つの神学校のうちメソジズムを伝えられるのは東京聖書学校だけとなり、今後この教団は、ますますカルヴァン主義的教会としての傾向を強めるであろう。

神から日本に寄託された“*The Christian Perfection*”という *grand depositum*（偉大な預託物）は、こうして今返還するときを迎えたといえる。

しかし、私たちメソジスト（“*The Christian Perfection*”という *grand depositum* を普及させるために、神から召しだされた人々）はこれをもって絶望してはいけない。今までの140年の預託期間は終了したが、今後新たに140年の預託契約を結ばないわけである。2150年に、「今から140年前に始まったメソジズムのムーブメントは……」といわれるような新しい契約。それは、本学会や、更新伝道会や、ホーリネス系のグループや、東京聖書学校の働きによって、今後スタートするはずであり、今すでにスタートしているかもしれないのである。

新しい預託契約とそれによるメソジズムの発展を夢に見つつ、筆をおくこととする。

（日本基督教団安藤記念教会員）



日本基督教団 横須賀上町教会堂外観



日本基督教団 横須賀上町教会 恵みの座



日本基督教団 横須賀上町教会 恵みの座



日本基督教団 横須賀上町教会 恵みの座

写真の説明

「日本基督教団横須賀上町（うわまち）教会の恵みの座」

横須賀上町教会は、1906年に日本福音教会により横須賀福音教会として設立された。

現在の会堂は、1931年に建設されたもの。ほぼ当時のままの状態で保存されている貴重な木造建築である。

そして、会堂の中には、明らかに「恵みの座」が存在している。

今回、拙論を書くにあたって調べた資料の中に、福音教会がどのような聖餐をしていたかといった聖礼典に関するものがなかったが、文書による資料よりも何よりも、福音教会がメソジストそのものだったという確かな証拠が、この旧福音教会時代に建てられた「横須賀福音教会」の「恵みの座」である。

この「恵みの座」により、福音教会が聖礼典においてもメソジストとほとんど同じであったことをうかがい知ることができる。

横須賀上町教会では、現在は「配餐」により聖餐式が行われているが、おそらく戦前はメソジストとまったく同じに、「恵みの座」に進み出て、跪いて聖餐に与っていたのだろう。

横須賀上町教会の他にも、同じく福音教会の伝統を持ち、古くからの会堂を維持している「根津教会」や「上総大原教会」など、ごく一部の教会に「恵みの座」が残されている。そして特に「上総大原教会」では、少なくとも1950年代までは「恵みの座」に進み出て聖餐式を執行していたことがわかっている。

このように、旧福音教会の多くの教会が、おそらく昔は「恵みの座」を持っていたと思われるが、「成全の教理」と同様、「恵みの座」もほとんどの教会で捨て去られてしまっており、残念ながらこの伝統も継承されているとはいえない。